

延慶本平家物語の「ムズ」小考

菅 原 範 夫

はじめに

- 一、「ムズ(ウズ)」の用例数と意味、用法
 - 二、「ム」・「ムトス」との相違
 - 三、「ベシ」との相違
- おわりに

はじめに

延慶本平家物語に用いられている「ムズ」について、その全体数と使われ方の特徴は小林芳規先生によって次のように指摘されている。

佐藤喜代治博士は例数を示されなかったが、筆者らの調査では、ムズ(終止形)・ムズル(連体形)ムズレ(已然形)を合わせて全三七四例が数えられる。その全例が会話文又は思惟文の中に用いられていて、地の文には一例も見られない。尚、「ムズ」「ムズル」「ムズレ」をそれぞれ、「フズ」「ウズル」「ウズレ」と表記した三例がある。〈中略〉三例とも、会話文の中にあることは言うまでもない。これらに対して、地の文では「ムトス」が使われる。〈中略〉

地の文では、ムトスは全部で一〇九例が拾われる。これにムトセ（未然形）・ムトシ（連用形）を加えると総計一七九例となる。⁽¹⁾（引用に際して用例、及び段落を省略した。）

中世の口語を特徴付ける語の一つに「ウズ」があるが、延慶本平家物語の「ムズ」も口語を特徴付ける語の一つとして考えられるものである。しかも、「ウズ」となっている例も見られることからすれば、両者は極めて近いものと理解される。更に、「ムズ」の使用は中世に入ってから急激に増加することも指摘されている。⁽²⁾ 鎌倉時代の延慶本平家物語の用例を検討することは、中世の「ムズ（ウス）」の意味、用法を考えるうえで重要であると考えられる。

一、「ムズ（ウス）」の用例数と意味、用法

さて、「ムズ」が他の助動詞と複合している様子も加えて用例数を見ると次表の如くなる。

	終止形	連体形	已然形	計
ムズ	四	一一七	三三二	一五三
ナムズ	四四	八	一	五三
テムズ	五	三		八
ナムズラム	一			一
テムズラム	二			二
ムズラム	一四八			一四八
ムズルナリ		一八		一八
計	二〇三	一四六	三三三	三八三

（北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語本文篇』に基づく一回の調査による。補読された用例も数える。「ウス」を含む。）

「ムズ」単独で用いられている例は一五三例、全体の約四〇パーセントで、複合して用いられる用例が過半数を超える。以下、複合等の用法別に従いながら、用例の検討を行う。

まず、「ムズ」単独で用いられているものから見て行く。

①木曾之ヲ聞テ「今井ハ乳母子也。根井、小室ハ今参也。乳母子ガ云フム事ニ付テ、是等ガ云事ヲ用ズハ、定テ恨ミムズ。……」(三末、兵衛佐与木曾不和二成事)

②五丈計ゾ落シタリケル。底ヲミタレバ猶五丈計ゾ有ケル。御方ヘ向テ申ケルハ「是ヨリ下ヘハイカニ思トモ叶マジ。思止給ヘ」ト申ス。「三草ヨリ是マデハルハト下タレバ、打上ムトスルモカナウマジ。下ヘ落シテモ死ムズ。トテモ死バ敵ノ陣ノ前ニテコソ死メ」トテ手綱ヲクレ、マ逆ニ落サレケリ。(五本、源氏三草山并一谷追落事)

用例①②は終止形の例である。①は「定テ」という副詞を伴って根井等が「恨むに違いない」という、必ず将来起こると考えられる事柄の推量に用いられている。②は一谷の崖を落とす時に崖の中途で進退極まった場面の表現で、直前の「打上ムトスルモカナウマジ」に對をなしている。「下に落とせば当然死ぬに違いない」という内容である。連体形は単独で用いられるものの中心をなしている。

③畠山庄司重能、大山田別当有重、折節在京シタリケルガ、申ケルハ、「何事カハ候ベキ。相親シク候ヘバ、北条四郎ガ一類コソ候ラメ。其外ハ誰カ付テ、輒ク朝敵ト成候ベキ。」ト申ケレバ、「ゲニモ」ト云人モアリ、「イサトヨ、何ガアラムズラム。大事ニ及ヌ」ト云人モアリ。寄合々々サ、ヤキケリ。大政入道宣ケルハ、「昔義朝ハ信頼ニ被語テ朝敵ト成シカバ、其子共一人モ被生マジカリシヲ、頼朝ガ事ハ、故池尼御前ノ難去被歎申シニ付テ、死罪ヲ申宥テ、遠流ニ成ニキ。重恩ヲ忘レテ国家ヲ乱リ、我子孫ニ向テ弓ヲ引ズルハ、仏神モ御ユルサレヤ有ベキ。只今天ノ責ヲ蒙(ン)ズル頼朝ナリ。アヤシノ鳥獸モ、恩ヲ報ジ徳ヲ酬トコソ聞ケ。昔ノ楊宝ハ雀ヲ飼テ環ヲ得、毛宝ハ亀ヲ放テ命ヲ助カルト云ヘリ。我子孫ニ向テハ、頼朝争カ七代マデ弓ヲ引ベキ」トゾ宣ケル。(二中、右兵衛佐謀叛発ス事)

右の例の「只今天ノ責ヲ蒙(シ)ズル」は「只今」という副詞を伴い、「天ノ責ヲ蒙」る事が近い将来必ず起こるであろうというもので、切迫した事態の推量となつてゐる。「我子孫ニ向テ弓ヲ引ンズルハ」は後の「我子孫ニ向テハ、頼朝争カ七代マデ弓ヲ引ベキ」の「ベシ」と響きあつてゐると考えられる。

④谷ノマ、二三丁バカリユケバ、道ニワカレタリ。弓手ナル道ハ城ノ前ヘヲリタリ。妻手ナル道ハ城ノ後ヘ通タリ。此道ヲ通りテ、城ノ後ヘ押寄テ、軍ノ時作給ヘ。時ノ声ヲ聞モノナラバ、城ニ火ヲカケ候ハムズルゾ。然ラバ北ヘノミゾ落候ハムズル。其時大手ヲラシ合セテ、中ニ取籠テ打給ヘ。(三末、火燧城合戦事付齊明ガ還中事)

用例④は火燧城の城内から寄手に内通することを告げる時の文書で、内通の次第を述べ、事の成り行きを予測し、それへの対応を指示する文章である。従つて、「北ヘノミゾ落候ハムズル」も、当然それしか選択の余地がないと考えられる事柄の予測である。更に、「城ニ火ヲカケ候ハムズルゾ」は、終助詞の「ゾ」を伴つて相手に強く訴えかけてゐる文であり、そこに用いられてゐる「ムズ」も当然の事ながら自分の意志の強いことを示すものに外ならない。

⑤サテモ法印帰参シテ、太政入道ノ御返事ノ様委ク奏セラレケレバ、誠ニ入道ノ恨申ス所一事トシテ僻事ナク、道理至極シテ被思食ケレバ、法皇更ニ被仰遣リタル御事モナクシテ、「コハイカミセムズル。猶々モ法印誘ヘテミヨ」トゾ仰事アリケル。(二本、院ヨリ入道ノ許ヘ静憲法印被遣事)

⑥法皇ノ御気色モヨクテ、蓮花王院ノ執行ニモナサレナドシテ、天下ノ御政常ニ被仰合ケルニ、「サテモ此事ハイカミ有ベキ」ト法皇仰ノ有ケレバ、「此事努々々不可有ト覚候。今ハ人多承候ヌ。何ガシ候ベキ。只今天下ノ大事出来候ナムズ。……」(中略)「サテ其ライカミスベキ」(二本、成親卿人々語テ鹿谷ニ寄合事)

用例⑤の「コハイカミセムズル」という言い方は、一方で用例⑥の中にも度々見られる「イカミ有ベキ」「何ガシ候ベキ」「イカミスベキ」と同様の表現である。適當の意味と言えようか。慣用的とも言える表現の中で同じ位置に立つ「ムズ」は「ベシ」に極めて近い表現内容を持つてゐると考えられる。

⑦『実盛六十二余テ後、軍ノ陣ニ向タラムニハ、シラガノハツカシカラムズレバ、ビムヒゲニスミヲヌリテ、ワカク見ムト思也。』(三末、実盛打死スル事)

已然形の用例にはコソを伴う場合が多く強調的内容の意味のものが多し。コソを伴わない例も用例⑦のように当然そう考えられるという意味のものが見られる。

「ムズ」単独で用いられている時の意味を見ると、推量、意志、適當、当然と広いものが認められる。先にも述べた如く、このうち適當、当然等の意味は「ベシ」が持つ意味と同じである。また、推量、意志の場合にも確実に実現が推測されるもの、必ず行おうという強い意志を表現するものが中心を占めている。これらの意味は、「イカガセムズル」二二例、「ムズル」二三例、「只今ムズ」五例と類型表現で多くが表現されており、他に「ヤガテムズ」「イカガシテムズ」等も認められる。連体形の「ムズ」のうち三分の一はこのような特定の表現である。意味の広がり、また、それぞれの意味の中での表現内容からすると、単独で用いられている「ムズ」の意味は「ベシ」と非常に近いものであることが分かる。

次に複合形に注目する。まず、「ナムズ」「テムズ」について見る。「ナムズ」は比較的多くの用例があり、全用例中の約一三パーセントを占めている。完了の助動詞と複合することで「ムズ」の推量は確実性の高いものとなっている。用例⑥「只今天下ノ大事出来候ナムズ」に見られるように、その確実性の高さは「只今」という副詞によつて更に修飾されている。「只今」以外には「必ず」「一定」「真先」等と共に用いられることが多く、全二三例を数える。いかに「ナムズ」が確実性の高い推量として強調されているかが分かる。「テムズ」は用例数がさほど多くは見られないが、「天台ノ仏法忽ニ滅テムズ」(二本、白河院三井寺頼豪ニ皇子ヲ被祈事)などと用いられ、「ナムズ」と同じ傾向を見せる。この「ナムズ」「テムズ」は「ムズ」の意味を一層強調している複合助動詞と考えられ、先に触れた「ベシ」との用法上の関連で言えば、「ヌベシ」「ツベシ」という強調複合助動詞と同様の表現形式と見られるのである。

次に「ムズラム」を見る。「ムズラム」は全用例の四〇パーセント近くを占めており、その用法の盛んであった事が分かる。さて用例⑧は「末代ハイカマアランズラム」とあり、「ムズラム」全体で推量の意味である。③の「何ガアラムズラン」も同じである。

⑧代上テハ、カ、ル事ニモサセル事モ出来ザリケリ。末代ハイカマアランズラム。人ノ心オボツカナシ。(二本、忠盛昇殿之事付闇打事付忠盛死去事)

⑨中ニモ徳大寺、一大納言ニテ才覚優長シ、家重代ニテ被越給シコソ不便ナリシカ。「定テ御出家ナドヤ有ムズラム」ト世人申アヒケレドモ、(一本、徳大寺殿殿嶋へ詣給事)

⑩良久クアリテ、一人ノ物付狂出テ……爰ニ貫首明雲ハ我山ノ法燈、三千ノ依怙タリ。而ヲ罪ナクシテ他國ニ遷レム事、一山ノ瑕瑾、生々世々ニ心憂カルベシ。サラムニ取テハ、我此山ノ麓ニ跡ヲ留テモ、ナニカハセム。本土ヘコソ帰ラムズラメ」トテ、袖ヲ兒ニラシアテ、サメハト泣ケレバ、(二末、山門大衆座主ヲ奉取返事)

用例⑨の「定テ御出家ナドヤ有ムズラム」も推量する事柄の時制は未来に互る事であり、また、「定テ」という副詞も伴っていることから、「ムズ」「ナムズ」について先に述べた用例と等しく確実性の高い推量を表しているものである。更に、用例⑩の「本土ヘコソ帰ラムズラメ」は強い意志の表現であり、ここにおける「ラム」は推量の意味はなく単に「ムズ」を強調しているものと認められる。この例から推してみれば前二例も同様の働きをしていると考えられ、「ムズラム」は全体として確実性の高い事柄の推量や強い意志の意味で用いられることが分かるのである。類似の表現には用例⑪の如く「イカゞ有ベカルラム」という例が認められる。

⑪皆夜ヲ日ニ継テ打上リ、平家ヲ滅サム事、日尅ヲ不可廻。平家ヲ滅テ、法皇ノ打籠ラレテ御坐ス御心ヲヤスメ奉ラセ給ナバ、孝ノ至リニテコソ候ハメ。神明モ必ズ恵ヲ垂給ベシ」ナド、細々ト申ケレバ、此事イカゞ有ベカルラムト、返々思召サレケレドモ、(二中、頼政入道宮ニ謀叛申勸事付令旨事)

この例も「イカガアルベキ」という表現の強調と考えられるものである。「ベカルラム」も延慶本平家物語に複数認められる。このように「ムズ」「ベシ」と複合して、それらの意味を強める「ラム」の用法は広く行われていたことが分かる。ここでも「ムズ」は「ベシ」と共通した一面を見せ、注目されるのである。

⑫ 泣々御頭カキ撫、御顔カイツクロヒ、御直衣奉ラセナド出シ奉ラセ給モ、只夢ノ様ニゾ被思召ケル。イカニ成給ナムズラムト思食サレケルゾ悲キ。(二)中、高倉宮ノ御子達事)

⑬ 「……此三年セハ、今ヤ今ヤト夜屋肝心ラケシテ、明シ晩シツレドモ、只今俄ニ出来タル不思議ナムドノ様ニサハ覚ルゾヤ。コヨヒニモヤ失テムズラム」ト心中ニハナノメナラズ思ナガラ、遁ガタキ事ト思テ、(六)末、六代御前被召取事)

用例⑫⑬の「ナムズラム」「テムズラム」は更に強調した形であろう。吉田金彦氏は「ムズ」に「ラム」の付く例が近古では著しく増加することを指摘した後で、「むず」が単純で終止せず下に推量の「らむ」を伴う事は中古からの傾向ではあったが、近古に至ってそれが急激に増大したのが注目される。これは恐らく「むず」に含まれる推量の意味では不十分なので、更に「らむ」を接続させることになったのであろう⁽⁴⁾と言われる。強調表現であることはその通りであると認められるが、複合した「ラム」は意味の意味の場合にも認められる。

「ムズルナリ」は用例⑭の如く「我孫ノ其御劍ヲバ給ハラズル也」などと見える。

⑭ 「……一座ニ御坐ケル人ノ、ユ、シク気高ゲナルガ宣ケルハ『日来清盛入道ノ預リタリツル御劍ヲバ、被召返(ム)ズルニヤ、速可被召返。彼御劍ハ鎌倉ニ右兵衛佐源頼朝ニ可被預也』と被仰。『是ハ八幡大菩薩也』ト申。又座ノ中ノ程ニテ、其モ以外ニ気高ク、宿老ナリケル人ノ宣ケルハ『其後ハ我孫ノ其御劍ヲバ給ハラズル也』ト宣ケルヲ『是ヲバ誰ソ』ト聞ケレバ、『春日大明神ニテ御坐ス』ト申。……」(二)中、雅頼卿ノ侍夢見ル事)

この「ムズ」は当然の意味を表していると考えられるものである。

以上、複合形等の別に従つて、「ムズ」の意味と用法とを検討してきた。単独で用いられる場合に最も意味が広く認められるが、意志、推量の意味のものが中心であり、複合して用いられる場合も同様である。注目される点は、意味の広がりよりもより、最も多くの用例を持つ推量の場合には実現が確實と考えられる事柄の推量に、意志の場合には必ず実現するという強い意志の表現に用いられている等の事である。しかも、その表現は、各所において「ベシ」の持つ表現と類似性を持つており、意味の上でも「ベシ」に近いものと認められることである。その点は更に次の事からも見逃せないことである。

延慶本平家物語は内容的に長門本平家物語、源平盛衰記と近いと言われる。比較してみると表現の上でもよく一致している。特に長門本とは一致の度合が高いと認められる。延慶本の「ムズ」も長門本と比較すると「ムズ」で一致を見ることが通例である。そのような中で、延慶本「ムズ」、長門本「ベシ」の対応箇所が散見せられる。用例④の「城二火ラカケ候ハムズルゾ」は長門本では「火ラカケ候ベシ」である。用例⑧の「末代ハイカミアラムズラム」も長門本では「イカミアルベキ」となっている。用例⑮の「アヤマチモ出来ナムズ」も長門本では「出来ヌベシ」とある。

⑮「去年ヨリ彼嶋ニオワシテ、定テ身モツカレ損ジ、病モ付給ヌラム。寒キ空ニ遙々ト上リ給ハ、上リモツキ給ハデ、道ニテアヤマチモ出来ナムズ。肥前国加世庄ト云所ハ味木庄トモ名タリ。彼所ハ教盛ガ所領也。……」(二本、建礼門院御懷妊事付成経等赦免事)

「ムズ」の複合の種々についていずれも「ベシ」と対応しているのである。数は多くはないがそれでも一〇例を超える対応を見せる。前後の内容・文脈も殆ど同じ箇所において、長門本では「ベシ」をもつて表現するものを延慶本では「ムズ」で表現していることになる。延慶本の「ムズ」は「ベシ」の意味に近い、あるいは「ベシ」に代わり得る意味を持つものであることを示していよう。延慶本内部での意味を考え合わせるとよく納得されるのである。

二、「ム」・「ムトス」との相違

さて、一方では、「ムズ」は終止形、連体形、已然形の三形しか持っていない。これは平安時代以来のことで、「ラム」「ケム」等と同様に「ム」の活用と同じである。「ムトス」は本文献においても他に未然形、連用形を持っており、各活用形の用法を見せるのでその点大きく異なる。活用形の中で未然形、連用形を持たない「ムズ」と持つ「ムトス」とは全く別の表現機能を持っていると考えられるのである。

「ムトス」は会話文の中にも用いられ、

⑬「……イカニ己程ノヤツハ入道ヲバ傾ケムトスルゾ。……」（二末、西光法師擲取事）
の如く連体形の用例は勿論、

⑭「……数代久成下テ、殿上ノ交リラダニモ嫌レテ、闇打ニセラレムトシ給シ人ノ子ニテ、……」（同右）
という連用形の用例もある。同じ会話文の中に用いられている例においても「ムズ」と「ムトス」とは基本的に異なっていると見られるのである。「ムトス」にあつては当然の事ながら、やはり、動詞「ス」の意味がはつきりと存し、その上に立って未然形等の活用形が揃っているのである。

活用の型からすると、「ムズ」は「ム」の系列の一語であると考えるのが妥当であろう。従来、平安時代の各用法において「ム」に比較して少し強い意味を持つものの、殆んど意味的に相違のないものとして扱われていることは、理由のあることと考えられる。「ムズ」の基本には「ム」と共通する部分が認められるということである。異本間の違いに基づく次の例がある。

⑮「只今大事出来ナムズ。コハ心憂態哉」（二末、一行阿闍梨流罪事）

右例の「ナムズ」が長門本では「ナム」となっている。延慶本の「ムズ」が長門本で「ム」となっている対応は少ない

ながら存し、それからすると「ムズ」と「ム」とがほぼ同意で用いられることもあるようである。

本文献における用例を見ても、「ムズ」と「ムトス」とは会話文と地の文とにおいてそれぞれが同じ意味で用いられるというのではなく、「ムトス」は会話文、地の文を問わず一定の表現として用いられている。それに対して「ムズ」は「ム」の系列の一語として会話文等に特徴的に用いられているものなのである。全体として両者の差は明らかであり、少なくとも本文献においては、同列に扱うべきものではないと考えられるのである。

同様に用法の観点から「ム」と「ムズ」との相違を見ると、決定的に異なるのが複合助動詞となる場合である。「ム」において完了の助動詞との複合は、

⑱ 「……他人ノ口ヨリ漏レヌ先ニ返中シテ、命生ナム。：」（一末、多田藏人行綱仲言ノ事）

の如く用例は少ないながら「ナム」の例は見られる。しかし、「ラム」との複合は見られない。「ムズ」において「ラム」との複合が盛んであることを考えると「ム」との違いは大きいものがある。更に、「ムズ」には同一文内で共に用いられる副詞に大きな特徴が見られたところであるが、「ム」には極めて少ない。右の諸点は前節において「ムズ」の特徴として述べたものである。平安時代の諸文献に比較して格段に用例数の多い本文献において顕著に見られるこれらの点がすなわち「ム」と「ムズ」との相違点である。意味の上での違いは第一節で述べたことが大部分それにあたる。「ムズ」の全体として見れば、共通する部分に比較して異なる部分が中心をなしていると見られる。ここにおいて、「ムズ」は「ム」と共通する部分は残しながらも、独立した意味、用法を持っていると考えられるのである。平安時代の用例において相違が小さいものであつたとするならば、この時期に「ムズ」の特徴が明確になつたものであり、中世に入って以後の「ムズ」が独自性を持つようになったと考えられるのである。

例えば、次の『新潮国語辞典』⁽⁵⁾の記述を見ても、延慶平家物語で見られた「ムズ」の特徴的な意味は②⑤の項目で取り上げられている。これらの意味は正に「ベシ」が担っていたものであり、かつ、引用例は中世の文献からのものであ

る。

むず(助動詞)

①話し手の予想を表わす。…だろう。「秋待つころほひに、ここかしこよりその人のもとへ去なんすなりとて〔勢語九六〕」

②切迫した予想を表わす。まさに…しそうだ。「やがて切り上らんずるものにてある間〔平家・殿上闇討〕」

③一般的な推量・想像を表わす。…だろう。「如何なる人かは、この頃、古今・伊勢語など覚えさせ給はぬはあらんずる〔大鏡一・陽成院〕。同じ事にてこそあらんずれ〔保元・為義北方身投給事〕」

④話し手の意思、決意を表わす。…しよう。「いづちもいづちも足の向きたらん方へいなんず〔竹取〕。今秋風吹かん折にぞ来んずる〔能因本枕五〇〕」

⑤適当・当然の意を表わす。…するのがよい。すべきである。「近習の人人に、いかがせんずるぞと常に御談合ありけり〔保元・新院御謀叛思召立事〕」

吉田金彦氏も軍記物から「ムズ」の用法に変化が見られるとしておられるが、意味の変化も含めて中世語の特徴と捉えられるのである。⁽⁶⁾

三、「ベシ」との相違

第一節で見た如く「ムズ」の意味・用法は「ベシ」によく似ているものであった。しかし、「ベシ」も多用されており、「ムズ」と「ベシ」の相違もなくはない筈である。まず、考えられるのが使用される場の違いがある。「ベシ」は後に口語から姿を消して行くことでその性格が知られるように、文語的な表現に多用される。勿論、会話文にも多用されており、会話文等に限定される「ムズ」に比較して多様な使用をされている。

具体的な違いを見るために、「ムズ」と「ベシ」が共に用いられている会話で検討してみる。

⑳「成経八才ニテ見參ニ罷入テヨリハ、夜ル昼候テ、所労ナムドノ候ハ又限ハ、一日モ御所へ參ラヌ事モ候ハザリツ。君ノイトラシミ忝クテ、朝暮ニ龍顔ニ咫尺シ奉テ、朝恩ニノミアキ満テ、明シ晩シ候ツルニ、何ナル目ヲ見ルベキニテ候ヤラン、大納言モ今夜死罪ニ可被行ト承候。父ノサヤウニ罷成候ナン上ハ、成経ガ身モ同罪ニコソ被行候ハズラメ」(二末、丹波少将成経西八条へ被召事)

右の例の「何ナル目ヲ見ルベキニテ候ヤラン」は意味が異なるが、「大納言今夜死罪ニ可被行」と「成経ガ身モ同罪ニコソ被行候ハズラメ」とは将来の確定的な推量として同じ意味と見られる。人づてに聞いた大納言についての推量は「ベシ」で表現され、自身についての推量は「ムズラム」で表現されている。

㉑「道ニテ若失ハレ給ハハ屍ヲモ誰カ隠スベキ。生ナガラ嶋ニステラレ給ハハ、家モ無シテ何かカスベキ。飢テヤ死給ハムズラン。コミヘテヤ失給ハムズラン。……」(二末、成親卿出家事付彼北方備前へ使ヲ被遣事)

右の「道ニテ若失ハレ給ハハ屍ヲモ誰カ隠スベキ」「生ナガラ嶋ニステラレ給ハハ、家モ無シテ何かカスベキ」の二例は、そのような境遇にある場合を一般論的に推量した表現である。一方の「飢テヤ死給ハムズラン。コミヘテヤ失給ハムズラン」は、基康が康頼の身の上を思いを馳せている文である。これは具体的な事柄について基康が推量している表現である。

右の二つの例文は、「ベシ」「ムズ」共に推量の意味を持ちながら、同一会話文内に用いられているものである。両例文に共通して見られることは、客観的あるいは一般論的な推量については「ベシ」で表現され、話者(思惟者)の主観に基づく推量は「ムズ」で表現されているという点である。さすれば、まず、この点において「ベシ」と「ムズ」の相違が捉えられる。しかし、これは意味上の相違ではなくして、用法上の相違と見られるものである。

また、次例の様に「ムズ」が意志の意味であるものもある。

⑳「世ハ末ナレドモ日月未ダズ地ニ落。国ハ賤ケレドモ靈神光ヲ耀ス。爰ニ貫首明雲ハ、我山ノ法燈、三千ノ依怙タリ。而ヲ罪ナクシテ他国ニ遷レム事、一山ノ瑕瑾、生々世々ニ心憂カルベシ。サラムニ取テハ、我此山ノ麓ニ跡ヲ留テモ、ナニカハセム。本土ヘコソ帰ラムズラメ」(一末、山門ノ大衆座主ヲ奉取返事)

次の例も「ムズ」の用法については変わりが無い。「ベシ」は推量、適當、当然と多様な意味で用いられている。中には「ベカラズ」等の様に「ムズ」にはない表現もある。推量以外には「ベシ」を用いることが通常であり、また、推量でも直接相手の身に関わることであれば「ベシ」を用いるようである。客観性を持つて推測できるという表現として用いることなのであろう。

㉓「宰相ノ成経ガ事ヲ強ニ被歎申候コソ、不便ニ覚候ヘ。尤御計有ベシト覚候。中宮御産ノ御祈ニ、定テ非常ノ大赦行ワレ候ワムズラム。其内ニ入レサセ給ベク候。宰相ノ被申候様ニ、誠ニ類ナキ御祈ニテ有ムズラムト覚候。大方ハ人ノ願ヲ満サセ給候ハ、御願成就疑有ベカラズ。御願成就セバ皇王御誕生アリテ、家門ノ榮花盛ナルベシ」(二本、建礼門院御懷妊事付成経等赦免事)

これらの同一会話内での用例を比較してみると、「ムズ」は「ベシ」にくらべて主観的な表現に用いられていることが分かる。従つて、「ベシ」と意味的に近いものではありながら、私的な判断である表現となっている。この点に、基本的には「ム」の系列の語である「ムズ」と「ベシ」との一線が認められる。使用の場が会話文または思惟文に限られるということも、口語的表現は私的表現でもあるという基本的性格を持つたのである。

おわりに

延慶本平家物語の「ムズ」は「ム」の系列には属しながら、平安時代とは異なる意味、用法を持つている。それは多く「ベシ」に近いものである。ただ、「ベシ」に比較すれば主観性の強い表現に用いられている。その主観的であるとい

うことが会話文・思惟文にしか用いられない口語的表現であるという用法上の特徴を導いているのであるが、口語においては「ベシ」に代わって用いられる場合が多く見られる。これは「ムズ」が中世に入ると独自の変化を遂げていることを示しているものである。用例数の急激な増加はこのような内的変化を伴うことによってもたらされたものであり、ここに中世口語としての「ムズ」の存在が認められるのである。

冒頭でも触れた如く、中世の「ムズ(ウズ)」を考える上で、この延慶本平家物語の意味、用法は基本となる。平安時代からの過渡期の状況、また、室町時代以降の「ウズ」の再検討等問題が残るが後考に俟ちたい。

注

- (1) 「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」(『鎌倉時代語研究』第十一輯昭63・5)
- (2) 吉田金彦「むず」(んず)の成立」(『国語国文』三一―八 昭37・8)
- (3) 関一雄先生の御教示によると、この意味は元来「むとす」が表現していたものである。
- (4) 注(2)文献。
- (5) 平成元年三月発行の新装改訂版による。
- (6) 注(2)文献。

付記

本稿の内容については「延慶本平家物語の「ムズ」小考」と題して平成二年度鎌倉時代語研究会で口頭発表した。席上御教示いただいた小林芳規先生を始めとする方々にお礼申し上げます。

補記

稿後、関一雄先生から「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」(一)(山口大学『文学会志』四十一、一九九〇)、同(二)(『山口国文』十四 一九九一)の御教示をえた。そこでは、平安時代の「むず」「むとす」について精緻な考察がなされている。本稿に関連する部分を要約してみると次のようである。

『源氏物語』『枕草子』以前では、「むず」と「むとす」の意味・用法に明らかな相違があり、「むず」は推量の助動詞であり、動作の主体の「意志」又は、話し手の「確信をもった推量」を表す。「むとす」は動作の主体（＝物語の登場人物）の「意志に基づいてする具体動作（＝目に写る動作）」を表す。また、「事態の推移」を表す用例もある。後、『夜の寝覚』では、「むず」に「べし」「むとす」と同意の例が見られるようになる。更に『浜松中納言物語』には「む」と同様の推量が見られるようになる。この指摘からすれば、「むず」には「む」とは異なる「確信をもった推量」という意味が当初よりあり、その意味から平安後期に「むとす」「べし」との意味的近似も出て来るということになる。延慶本平家物語の意味を考えるうえで前提とした平安時代の「むず」の意味も異なることから、また、御教示に従ってより細かく改稿すべきかとも思うが、諸般の事情で旧のままとする。

（初稿時）